

中国の高考「ゴォーコォー」(大学入学試験)

6月7日～9日、年に1度の中国高考が行われました。高考は「全国普通高等学校招生入学考試」と言い、1976年文化大革命後、鄧小平氏が再開した大学入試制度です。日本と違い中国では、原則、大学や専攻ごとの試験は行われず、この高考の結果のみで合否が決まります。ですから、この3日間は、今年の受験生1031万人の、そしてその家族の運命を変える3日間であったと言えます。

中国には大学が1237校、短大が1359校あり、2018年の進学率は81.8%で、多くの受験生は高考の結果により、次の教育段階へ進むことができます。しかし、これらの大学のうち、トップレベルの大学は10数校しかありません。理想の大学へ進学することは、全受験生の最大の願いです。中国では昔から教育を重視し、各家庭も教育に投資を惜みず、受験生は、この一生に一度きりのチャンスを掴みたいと強く思います。

このようにして、大勢の学生が同時に“狭い棒状の橋”を渡るような状態が生まれています。例えば、去年の受験生923万人のうち、名門・清華大学の合格者は6558人、つまり合格率はたったの0.07%でした。

中国の高校も日本と同じく3年制です。多くの高校は学生がよい成績を収められるよう、最初の2年で高校3年分の授業内容を全て終わらせ、最後の1年を復習にあて、高考に向けた特別訓練、主に模擬試験に多くの時間を割くこととなります。週6日学校に通い、1日5、6時間の睡眠で、食事・トイレ・通学時間以外は全て試験、講習に充てられます。

このように知力だけではなく、体力も必要な高考「戦争」。もし体調を崩し、2日間休んだとしたら、2日分の模擬試験用紙が学校の机の上にも山積みになっています。

大学入試に重点を置いた高校は、大学進学率が高いため、高校入試の段階から高い人気となります。つまり、高考の「戦争」はすでに高校入学前から始まっているのです。

この高考という“戦争”を切り抜けるには、家族の協力が不可欠です。母親は、受験生の栄養、休憩、スケジュールを全て管理し、受験生が全力で知識の吸収と試験に集中できるよう、全面的にサポートします。買い物といった用事は勿論、母親が学校まで送迎する姿をよく見かけます。父親は“サポート役のサポート役”に徹します。

中国では6月は夏ですから、気温が高い地域では30度くらいになりますが、家族全員で受験生を試験会場まで送り、その暑さの中、外で試験終了をずっと待ち続けます。

近年、政府も高考を重視していて、試験日には警察官の人数を増やし、警備にあたります。高考は受験生、家庭、学校、社会、政府に関わる試験と言えます。



【試験会場の外で待っている保護者達】